

国分寺市障害者基幹相談支援センター事業

平成 30 年度 国分寺市相談支援スキルアップ研修・ネットワーク研修Ⅲ（児童ネットワーク研修）  
「発達に気がかりのある子どもと家族の実際～でこぼこ 3 人組の子育てから～」

研修開催報告書

日 時	平成 31 年 2 月 26 日（火）	場 所	cocobunji プラザ リオンホール B
	午前 9 時 30 分～午後 0 時 30 分	主 催	国分寺市障害者基幹相談支援センター

1. 目的

- ・障害のあるこどもの子育ての実際と家族の思いにふれることを通して、本人の育ちへの支援に活かせる視点を持つ。
- ・研修を通して、市内の障害児を支援している関係者の顔の見える、考えがわかる関係を作り、支援におけるネットワークの構築をはかる。

2. 講師

角田 みすゞ 氏（ベル相談室 臨床心理士）

3. タイムスケジュール

- 9:30～9:35 開会挨拶（国分寺市障害者基幹相談支援センター センター長 銀川紀子）  
9:35～10:40 つながるワーク（チームビルディング）  
（休憩）  
10:45～12:30 講師講演  
12:30～12:35 閉会・事務連絡

4. 参加状況

参加人数：21 名

〈分野別参加実績表〉

分野	事前申込	参加実績	実績内訳
障害福祉分野	12 名	12 名	相談支援事業所 5 名，児童発達支援事業所 3 名 放課後等デイサービス事業所 4 名
児童福祉分野	10 名	8 名	保育園 6 名，学童 3 名
地域福祉分野	2 名	1 名	学習支援事業担当 1 名
合計	24 名	21 名	

他，事務局（基幹）5 名参加

## 5. 講演内容

### ①つながるワーク（チームビルディング）

今回の研修の目的である「ネットワーク構築」を念頭に、フルーツバスケットを通してチーム全体の雰囲気を作りながら、以下のワークショップを参加者全員で行い、ネットワーク構築を体感した。

風船を使用したワーク：チーム形成、メンバーシップ、チームワークの体験

バンダナを使用したワーク（信頼の輪）：相談の距離、信頼関係、ネットワークの安定と揺らぎの体験

### ②講師講演

#### 「発達に気がかりのある子どもと家族の実際～でこぼこ3人組の子育てから～」

帰国子女、超未熟児、自閉症（現在28歳）を末っ子にもつ3人の母である講師の角田みずぶ氏（ベル相談室臨床心理士）から、家族としての思いや発達に気がかりのある子どもの育ちなど、地域生活になじみにくいでこぼこ3人組の子育てと家族の実際について講演があった。親としての体験談を中心に、家族や支援者の役割と課題や、関わり方の原則、一人ひとりを尊重した丁寧なあきらめない関わりなど、支援者が持つべき視点についての講演がなされた。

#### 《講演内容の概要》

##### 「よく撮れたワンショットを探す」

支援者が家族や本人に会う一コマは、写真のワンシーンのようなもの。いろんな苦労があって、よく撮れた1枚は母親をととも元気にする。「お母さんを元気にする一コマを一緒に探していきましょう。いい写真を増やしてアルバムにしていきましょう」という心持で支援してほしい。支援者から見えた本人の良かったこと（ベストショット）を母親に見せることが、母親の元気につながる。

相談に来る親が何も知らない人だとは限らない。臨床心理士の私も、相談に行くときには専門職であることは言わない。自分の前に座った相談者には、それぞれ豊富な人生経験があるという尊敬の心を持って、支援者には関わってほしいという願いがある。

##### 「ピープルファースト」

時間を味方に、people first の考え方で、時間とともにみんなが少しずつ成長し、回復することを願っている。子どもに名前をつけた時、自閉症だとは思っていなかった。「うちの自閉っ子」のように、本人の名前ではない言い方で示してしまうと、それを聞いた人は、自分が知っている自閉症で本人を理解しようとしてしまう。それは違う。まず人（people）が最初に来て、役割や条件は後からついてくる。母親もいつも「お母さん」と言われていたら重くなる。最初に人がいるところから考えたい。

##### 「親になる、我が子を知る、が始まり」

目の前にいる子どもを知ることからすべては始まる。その時、親の観察眼に勝るものはない。子どもの話を親とする時には、専門用語ではなく、普段の生活の言葉を使ってほしい。今の親は、昔と違い「自閉症」や「感覚過敏」といった専門用語をよく知っているが、専門用語を使ったとたんに子どもは見えなくなる。例えば「感覚過敏」と聞いたら、たいていは、自分が過去に聞いた、あるいは本で知識として読んだ感覚過敏を思い浮かべる。それは目の前の本人を知ることにはならない。「感覚過敏」というよりも、「緑色の野菜はほとんど口にしません」「耳の周りで音がすると嫌がります」「サクサクした触感は大丈夫だけど、ねっとりしたものはだめなんです」と言った方が、本人が思い描かれ、目の前の子どもが分かるようになる。普段の言葉で支援者が質問し、話すことが、親が我が子を知ることにつながり、親への教育にもなっていく。支援者が基地となり、子どもへの理解をサポートしてもらえたら嬉しい。

##### 「承認する」

私の子どもは、ベッドのシーツや枕カバーの 共布を持っていると安心してた。多くの時間を押し入れの中で過ごし、足の裏の感覚の繊細さから、ツルツルしている所を好んで過ごしていることが多かった。それを主治医は「こだわり」や「感覚過敏」とは言わなかった。「それは本人にとっての安定剤で

すね。いつ卒業できるか一緒に見ていきましょう」と言ってくれた。指しゃぶりを「歯並びが悪くなっちゃうよ」と言われたり、「お母さんがもうちょっと抱っこしてあげて」「お姉ちゃんも抱きしめてあげて」と言われたりすると、落ち着いてふり返ってみれば良いアドバイスだと思えることも、大変な渦中には「一体どうすればいいの?」としか思えない。アドバイスをする前に、「大変だったでしょう。ちゃんと来てくれてありがとう」と、まずここに親が来れたことを支援者は承認してほしい。「お母さん頑張っているね」の一言が、前に進む原動力になる。母親は、子育てや生活に役立つ肯定的な理解がほしいと思っている。子どもと向き合えるようになるために、まず窓口に来てくれた親を承認していくことがとても役にたっていく。

親が子どもと一緒に過ごす条件が満たされない時、親を子どもから引き離すことが必要な時もあるが、その際は、誰がそれに変わるのか、ということも併せて考えていってほしい。親を罰することだけでは子どもは幸せになれない。叩いている親が叩かない親になれるようにサポートするものが必要になる。

### 「子どもの育ち、子どもを知る手がかり」「親になる、子どもを知るのが始まり」

発達に物差しのほとんどは正規分布図に基づいている。図の中心部分の約60%に当たる人たちを通常発達と呼ぶが、中心の60~80%に入れない、低い10%と高い10%の両端の人たちはとても大変になる。よくできることも不便であり、できないこと、できることの両方に大変さがあることを、支援者には理解してほしい。

発達に気がかりのある子どものきょうだいは、障害のある子どもたちや、その周りで起こることに対する経験や知識を他者より多く持っているため、高いレベルの10%にあたる人も多い。「いいじゃない、できるんだから」と言うこともできるが、「どんなことが大変なの?」と言ってあげることもできる。少数派に対する共感を持って接してほしい。これは発達に気がかりのある子どもの家族が望んでいること。

日本では多くの場合、みんなと同じにみんなで仲良く、がスローガンのように言われているが、両端の低い10%、高い10%の子どもたちはみんなと同じにするのが難しく、仲間外れになったりする。日本では、パワーが大きい人たちは、力を発揮すると和を乱すと思われている。そのため、力を発揮していない中で起こることを、いつも受け入れなければならない。力を発揮しても大丈夫なやり方を、支援者たちが見つけていけたら、発達に気がかりな子どもたちを含んでいる家族を、その家族らしく支援していけるのではないか。そんなネットワークができることを希望している。

### 「家族・支援者の役割と課題」

家族や支援者には、直接的な子育てや支援の役割があり、それは療育と呼ばれている。子どもを教え、育て、認め、任せるまでが課題となってくる。私は主治医から教わりながら配慮のある子育てをしてきた。親が「ダメ」と言いたくなる行動にも、主治医は肯定的な見方(例:素晴らしいバランス感覚です)をしてくれた。叱るのではない、肯定的な関わりが必要なのだと学んだ。自閉症の子どもに教えるようになって思ったのは、教えるには果てしない時間がかかる、ということだ。テーブルの向こう側の椅子に座る、ということだけでも何ヶ月もかかった。教えてから任せるまでの、ひとつひとつを理解できるように教え、育て、認めていく過程に大変多くの時間がかかる。それを家族が担っている。支援者もその家族が担う役割の一員として、本人に任せるまでの過程に参加してほしい。

間接的子育てや支援は、コーディネイトとも呼ばれる。役割には本人への通訳がある。本人が自分でできるように、尋ねながら、確認しながら、どのようにすれば良いかを支援し、関わっていくことが通訳にあたる。通訳し、認めていくことによって、子どもたちが育っていく。相談員は間接支援者として子育てに関わっていると言える。その他、周囲への通訳もある。例えば、離れた後ろで本人を見守り、周囲の人が本人の行動を心配している様子がある時に、目を合わせてじっくり会釈すると周囲は安心する。これは間接的な通訳にあたる。また、「一人で買い物するから見てあげて」と周囲の人に頼むことや、「今は欲しいものが手に入らなくて泣いているんです」と周囲に説明することも間接的な通訳になる。親にも支援者にも、みんなに通訳の役割を担ってほしい。

親は利用サービスの調整もしている。例えば、熱があるとき、学校というサービスではなく医療というサービスを利用する調整を親は自然に行っている。支援者が行くと仕事として有料になることを、親は無料で行っている。親は、周囲から怒られることが多いが、そんな中で相談員や支援者から、「よく判断して調整していますね」「すごいですね」と承認されることで、親たちは頑張れる。

### 「自分の人生と折り合うこと」

自分が思い描いていた未来が失われ、家族がそこに折り合わなければならないことには、とても時間がかかる。子どもが小さいうちは、食事、排泄、日常の一つひとつに長い時間がかかり、子どもとの距離をものすごく近くしなくてはならない大変さがある。一方、子どもが大きくなると、距離を離さなければならなくなる。「お母さん、もう一人で大丈夫ですよ」「離れてください」と言われるようになるが、母親はすごく心配になる。信頼して送り出すことには大変な勇気が必要。自分の人生と時間をたくさんかけてきた子どもに対して、世話だけが自分の生きがいになる母親も多い。子どもとの距離の問題は大きい。母親が自分の人生と折り合い、自分の人生を生きられるようになること、家族が自分の人生と折り合っていくことを支援してほしい。自分が失ったものと得られたものは何か、がわかることが、自分の人生と折り合うということである。偶然の運命を受け入れて生きる、その周りには支援者がいる、そのようなネットワークができることは希望になる。

### 「カウンセリングで学んだこと」

本人の言動を否定するのではなく、「そうだよ」と一回受け止めること。一回受け止めると、本人の荷物が軽くなる、ということが起こる。そのあと「どうしてだと思おう？」ときいてあげることでもできる。解決が難しく答えが出ない時でもできることは、“応じる”ということ。この“応じる”という答え方はとても役に立つ。「早く助けてあげたい」という自分の逸る気持ちを自分で落ち着かせ、一回受け止めて応じることが、関わっている支援者たちにできると良い。

子どもたちに課題が多くあった時には、思春期外来の先生から勧められて、自分(母親)のカルテを作る取り組みをした。自分の家族の問題について話すだけ、聞くだけ、という自助グループに約1年間参加し、最初は自分のことを話す気はなかったが、だんだん、自分のことを話すことは、すごいことだとわかり、自分のための受診ができるようになった。これは親としてとても成長した。

カウンセリングや相談では、自閉症を治したり、学校に行かない子を学校に行けるようにすることはできない。できるのは、来てくれた親の相談にのることだけだ。また、親が当事者として、一人の人間として輪の中に参加して、皆が知恵を出し合いながら話し合う方法をオープンダイアログと言う。相談には直接相談だけではなく環境調整もある。

### 「当たり前が難しい」

発達が気がかりな子どもたちは、みんなが当たり前だと思っていることが難しい。そんな子どもを親はどうコントロールしたら良いかわからず、叩いたり、怖がらせたり、放置するしかない状況をネグレクトだと言われたり、そのような対応が、ひどい母親だとうつることもある。

地域の中でも、みんなの当たり前に合わせていくことは難しい。結果的に仲間外れになっていく。親にとって、そんな毎日の中で、それらをどう解決していくかを考えることはとても難しく、一体どうしたら良いかわからない思いを家族は抱えている。良い事例があっても、「そんなに時間がかかるのか」と思うのが家族の実際。普通を望むのがぜいたくだなんて、と思う、そんな日々の繰り返しの中で、母親が相談に来ることを想像してほしい。「よく今日来たね」と言ってもらえたらそれだけで救われる。

### 「親になるために苦しかったこと」

みんなに間に合いたい気持ちを横に置くことは、今でも苦しいと感じる。みんなと同じように、学校を卒業したら就職してほしい、という気持ちを横に置くことは、修行のような苦しさだった。みんなと同じバスに乗れない焦りや苛立ちと、自分だけという孤独感が押し寄せる。どんな大人になって、どんなふう自立していてももらえるのだろうか、みんなに間に合わないことは分かっているのに、目的地向かう事をあきらめないことも、とても苦しかった。投げ出したい、と何度も思う母親の罪悪感に、支援者はアプローチしてほしい。投げ出したくなったり、誰かのせいにしたりする、自分の弱さを受け入れていき続ける(ライフを保つ、歩みを止めない)ことが、親は苦しいと感じている。いつも「わかってほしい」と思いながら、「わかるもんか」と気持ちをぶつけないで、揺れる思いがある。わかってほしいのに、他にぶつければいいところがなく、止められない。その度に、自分と向き合う苦しさを抱えた親たちが、皆さんの相談窓口に来ていてほしい。

### 「手帳がとれない」

記憶力がよく、転勤の度に行う知能検査の答えを覚えてしまうことで、療育手帳がとれなくなることを経験した。ばらつきがあっても自閉症であることは変わらないのに、手帳がとれない。知的に豊かになることは人生を豊かにするが、手帳が取れない中で生きるとはとても大変だった。そういう過酷は本人の中に刷り込まれていく。検査は対象者に応じて、本人の特性に見合わせて行ってほしいと願う。

世の中は良くなっていく。平成23年に大阪の市長が、自閉症の診断がある人には、知的障害があっても精神保健福祉手帳を発行すると宣言し、これにより発達障害がある人が精神保健福祉手帳を取得することが可能になった。しかし、発達障害としてではなく、精神障害としての手帳を求められることの難しさには、相談者として気づいてほしい。「私は自閉症(障害)ではなく、あなたを見ているのです」と伝えて、目的地にいっしょに伴走してくれる支援者がいてくれたら、とてもありがたい。

### 「親としての人生」「きょうだいとしての人生」

親たちには、「今の自分と仲良くなろう」「障害を受け入れて当たり前という前提に負けないで」と伝えている。多くの専門家は、あの親は障害受容ができていない、という眼差しを向けてくるが、それを受け入れるのはとても大変な事。例えば診断がおりた日、あるいは就学時に他の児童とは違う部屋に通された時、きょうだいに本人の障害を伝える時、きょうだい結婚する時など、何回も障害受容を迫られる場面があるが、そう簡単なことではない。“障害を受け入れて当たり前”に負けなくていい、今受け入れられないならそれでいい。「偶然の運命を受け入れる猶予時間を自分にあげよう。だから生きて。」と伝えている。母を助けることが子どもを助けることにつながる。ゆっくり親になることを、一緒に歩んでくれる人がいてほしい。日本の今の制度は分断されているので、定点で子どもを見ていけるのが家族しかいない。家族の力を上げることが役にたつが、血のつながりだけではない家族がいてもいい。本人を中心につながるネットワークをファミリーと呼んで取り組んでいけると、家族ができることはもう少し増えるかもしれない。

家族をサポートしていく時、きょうだいたちに起こってくる出来事もたくさんある。きょうだいにあまり多くの期待をかけるのは大変だと伝えたい。きょうだいにも支援が必要になった時には、ぜひ支援可能な機関の紹介をしてあげてほしい。一番頼りになっていきょうだいが、今度は支援の対象になることもある。本人にもきょうだいにも、選択肢をあげる言葉遣いをして、自分で選べるコミュニケーションが取れると良い。そのようなコミュニケーションを支援者が親にできると、親は支援者を通して学ぶことができる。

親にとっても小さな赤ちゃんは突然だが、きょうだいにとっても突然のこと。小さい赤ちゃんをどう撫でたらよいか、どう声を掛けたらよいか、看護師たちからたくさん教わり、関わりを育ててきた。経験の蓄積によってできることが増えていく。子育てに特別はない。一人ひとりに合わせることはあっても基本は同じ。家族の一員として生活してほしい。人生山あり谷ありで、いろいろなことが起こるが、先のことはわからない。その時は一緒に考えますよ、と支援者が言ってくれれば、親は今のことに力を使えるようになる。

### 「世間とたたかわない」

案外世間の目は自分の中であって、厳しいもの。叱る声や自分の中に聞こえてしまう時には、自分と仲良くすることが大事。周囲の言う通りにすることはない。今自分の頑張っていることをほめていくことが、「世間とたたかわない」という工夫の仕方。支援者はぜひ、お手本を示してほしい。

### 「父親と母親は違って良い」

療育において父母の意見が違ふことはよくあるが、夫婦の意見を一致させる必要はないと教わり、とても役にたった。父親と母親は、一緒も違いもあって良い。いろいろな違いを子どもたちは見抜いて過ごしている。家族という一番小さな社会が、子どもが育つ経験の始まり。いろいろな人のいろいろな違いの中で生きられるように育てるために、父親と母親は違って良いという考え方を大事にしている。

### 「暮らしの中で きょうだいが歩み寄ること、本人が歩み寄ること」

きょうだいが我慢するところ、本人が我慢するところ、両方を作ることによって、きょうだいも本人

も育っていく。どちらからも歩み寄ることが、暮らしの中では大事であり、「時間を味方に」と思っている大きな背景である。偶然を活かし、ピンチをチャンスに変えることが、子どもたちが成長してきた原動力になっている。みんなで一生懸命やってもどうにもならない時に、チャンスがやってくることを支援者は知っておくと良い。

### 「生きるために大切なこと」

子どもの発達基地をつくる、ということについて話してきた。子どもの育ちを見届けてほしい。大人になっても子どもたちは育っていく。そしてゆっくり成長する。6年間できないこともあるが、6年間できなかったからといって、これから先もできないわけでもない。7年かけたらできることもある。チャレンジも起こる。今できないからといって、これからはずっとできない人だと決めないでほしい。あなたには無理、と早く決めすぎてしまうと、その支援によって子どもたちは伸びないことが多いと感じる。時間を味方に、子どもの成長を信じる関わりをしてほしい。基本は繰り返しやってくる。「人の中で生きる」という、生きるために大切なことはずっと変わらない。人の中で生きるために必要なことは、人から教わる姿勢を身に着けるということ。これはどの子どもにも有効で、どんな大人にも同じように大切。「人として生きること」「人の中で生きること」「そのために人から教わる姿勢を身に着けること」が生きるために大切なことだと考えている。

### 「時間を味方に」

育てておきたい子どもの力として、行動や生活技術の開発がある。できる、わかるをたくさん育てることが、療育場面ではよく行われている。もう一つ、とても大事なものは人との関係と人から教わる姿勢。発達障害領域の人たちは、自分の興味のあることにはものすごく力を発揮するが、そのことだけで一生生きていける人はほんの一握りである。働くときには人を意識できないと難しい現実がある。人から教わる力をどう育てていけるかが、療育の中心であってほしいと思う。これが人の中で生きる基礎になる。また、自我の形成、自分を育てることも大事。自立への基礎でもあり、自己選択・自己責任の時代においてはとても大事なことである。本当に子どもがそれを選んでいいのかどうかについては、丁寧に見てほしい。自立の課題においては、本人が積み重ねてやっとなってきたことに対しても、支援者は改善すべき課題を中心に見てしまいがちなことを意識してほしい。まず初めに「よく頑張ったね」「できたね」と受け止めてから、課題を共有することを大事にしてほしいと願っている。

子育てで大切にしたいのは、人として育てること、人の中で生きること。時間を味方にゆっくり親になることを支援者みんなに支えてほしい。

## 6. まとめ

今年度より、毎年1回、障害福祉分野にとどまらない、分野を超えた、市内の障害児支援関係者のネットワーク構築を目的として、児童ネットワーク研修を開催することになった。第1回目となる今回は、他分野の関係者も関心を得やすいテーマ設定を検討し、「発達に気がかりのある子どもと家族の実際」とした。親の立場でもあり、臨床心理士として支援者の立場でもある角田氏に講師を依頼し、講師の体験談から支援に必要な視点をお話いただくと共に、参加者全員参加のワークショップを通して、相談者との距離感（信頼関係）やチームワーク、ネットワーク構築を体感として学ぶことができた。初めて顔を合わせる他分野の方々とこれらの体験を一緒にできたことが参加者からも大変好評で、今後のネットワーク構築において非常に有意義なことだったと考えている。また、発達に気がかりのある子どもを支援する際には、親への支援が大変重要であることが角田氏の講演を通して共有でき、今後の親への支援に活かしたい、という参加者からの感想を多く得ることができた。明日からの実践に活かせる学びを、分野を超えて共有できたことが、今回のネットワーク研修の大きな収穫だったと考えている。

一方、今回の研修会で障害児通所支援事業所の参加が少なかったことは、今後の研修企画において課題になる。来年度から定例開催となる障害児通所支援事業所連絡会での意見交換内容も踏まえ、多くの事業所が関心の持てる内容を企画し、研修会を通して市内の障害児支援関係者のネットワーク構築を広く推進できるよう努めていきたい。



## 7. アンケート集計結果

研修参加者：21名 アンケート回収：21名（回収率：100%）

### 1. 本日の研修はいかがでしたか。

たいへん参考になった	16名（76%）
参考になった	4名（19%）
普通	1名（5%）
あまり参考にならなかった	0名（0%）
その他	0名（0%）
無回答	0名（0%）

- ・ワークとその解説が興味深かった。
- ・自分自身も3人の子育てをし、末子が自閉症の診断を受けた。これまでのことを思い出して、共感することがたくさんあった。改めて気づいたこともあった。
- ・当事者の大変さを実感できた。
- ・初めのワークでは、ゲームを通してチームワークを体感し理解することができた。
- ・母親の大変さを改めて感じた。今回の研修内容を施設の職員間で共有したい。
- ・最初のワークで実践的なコミュニケーションをとる時間があって、頭だけでなく身体で体験できたことが良かった。角田先生の明るさ、強さに励まされた。
- ・前半のワークで、ネットワーク、顔の見える関係、チームについて、体感することによって学ぶことができた。母の立場、相談の立場、兄弟の立場、いろいろな視点からの意見を知り、すべきことを学んだ。
- ・チームビルディングでは、「チーム」としてまとまること、相手や他の方とのバランスなどを体感できておもしろかった。角田先生のお話はひとつひとつとても勉強になり、聞いて本当に良かった。
- ・フールズバスケットから始まり、人との考え方の違い、色々な考え方、自分はこう感じたけど他の人はこう思っていた等、とてもわかりやすかった。
- ・ワークが楽しく、支援について体を使って学ぶことができた。
- ・とてもよい研修だった。「チーム作り」の話や体を使っての体験も興味深く、もっと学べたらと思った。

### 2. 発達に気がかりのある子どもと家族への支援について理解することができましたか？

よく理解できた	17名（81%）
理解できた	4名（19%）
普通	0名（0%）
あまり理解できなかつた	0名（0%）
その他	0名（0%）
無回答	0名（0%）

- ・お母さんの悩み、どんなところに不安を感じているのか、少しわかったような気がする。
- ・家庭内でのリアルな体験の話を書くことが無かったので、とても参考になった。もっといろんな支援ができるようになって、助けになりたいと思った。
- ・親を助けることが子どもを助けることになるという言葉が印象に残っている。
- ・家族への言葉がけや関わり方について理解することができた。
- ・母親の日々の頑張っていることを忘れないよう、子どもを迎えに来た時など明るく接していきたい。
- ・角田先生の実体験を聞き、支援する側と支援を受ける側の両面の話が分かって良かった。
- ・先生の子育て、機関との関わりを知ることができた。まずは受け止めることの大事さ、肯定することを学んだ。
- ・もっと勉強したい。
- ・子どものことだけでなく、保護者の支援をすることの大切さがわかった。
- ・家族としてのエピソード、これまでの歩みに、本当によく今日をみんなを迎えられたなという思いがした。ろうそくを消すまでの7年の年月、本人のできる力を信じ続けてこれたからの結果、『発達』の深みと、日本での平均外になったときの辛さがなんとも考えさせられた。

### 3. 今後、実際の業務で取り組みそうなことは見つかりましたか？

- ・保護者対応の参考になった。
- ・子ども、親への受容の声かけ。一旦受け止める。「世間の目」に与しすぎない。
- ・理解することが基本ということ。
- ・相談者としての姿勢。
- ・前半のワークがとても良かった。連携支援、チームが体感できた。
- ・「まず受け止める」から始めようと思う。
- ・学んだことを親支援にいかしたい。
- ・課題を一緒に共有する。
- ・相手の立場にたって考えるということ。
- ・子ども一人ひとりのこころを大切にしよう、その日の心の不安定な時があった場足、できるだけ声をかけて話をしていきたい。
- ・保育士として、保護者の立場や想いに寄り添っていきたいという思いが強くなった。
- ・親が相談に来れていることへの評価や、「わかってほしい」「わかるはずがない」の心の揺れなど、相談時に理解すべき視点を意識できた。
- ・相談の立ち位置や、母親に対する助言。
- ・保護者との関係など、ひとつずつ取り組んでいきたい。
- ・最近発達障害児をもつ親からの相談があり、自分もそういう親だったことを忘れていたが、親の身になって支援にのぞめるようにしていきたい。
- ・まだ実際に取り組めることまでは見えていない。自分が親だったらと重ねて考えたり、支援者として何ができるだろうと思うと、何もできないような思いになった。“時間を味方に”は自分にも言えて、そういった成長を、焦らず、手放さず、していきたいと思った。

### 4. 次年度以降も、児童ネットワーク研修は年1回のペースでの継続開催を予定しています。

今後の研修で取り上げて欲しい内容や研修会への要望等ご自由にお書きください。

- ・ほめられるのが嫌いな子どもへの関わり方。
- ・発達障害
- ・生理学
- ・障害者が育つ道すじ
- ・全員の名前と所属が聞けたら良かった。せつかく顔を見てコミュニケーションをとることができたので、もう一步深くつながりたいと思った。
- ・横の連携強化について
- ・もっとたくさん角田先生の話聞いてみたい。
- ・ペアレントトレーニング。
- ・多くの方と接することができ、充実した研修だった。ありがとうございました。
- ・いつも“顔の見える関係”へのネットワークづくりの企画をありがとうございます。今回あまり名刺交換ができず、せつかくの機会を申し訳なく思った。でも久しぶりにあった関係者とも話せて、またつながりも持てた。子どものことでは、『虐待予防の観点』や、『家族を観る』などが関係者の方と一緒に学べると良い。

### 5. 所属している団体についてお教え下さい。

障害福祉分野： 5名  
地域福祉分野： 2名  
教育機関： 0名

児童福祉分野： 12名  
行政機関： 0名  
その他： 3名